

## 琉球 / 沖縄における死の文化の創造

越智 郁乃

### はじめに

本稿では琉球 / 沖縄を例に、異文化接触と死をめぐる文化創造について論じる。

報告者の専門は文化人類学・民俗学である。人間の移動によって生じる文化変容をテーマに、調査地で生活しながら、参与観察、聞き取りをした資料をもとに研究を進めている。今回は琉球 / 沖縄における葬送儀礼の変容を例に、死をめぐる文化の創造について検討を加える。

民俗学、文化人類学で対象とする祭礼や儀礼などの民俗文化は、伝統的習俗あるいは古代の残存物とみなされ、現代の急激な社会経済的な変化を受けて消えゆく、あるいは過去のものであるといった「衰退、消滅の語り」に収斂しやすい。日本に加えて米軍の支配により複数の国家との重層的かつ非対称的な関係が継続的に形成されてきた琉球 / 沖縄でも、日本や米国の影響により「固有の民俗文化」が「衰退」していると指摘されてきた。それに対し本稿では、ポストコロニアルな状況において死をめぐる文化が創造される様相を示したい。

### 1、琉球 / 沖縄という接合域と多面性

まず、琉球 / 沖縄の歴史をごく簡単に振り返っておきたい。南西諸島では、13世紀にかけて貝交易を通じて中国の時の王朝や大和政権とのつながりを持ってきた。14世紀、中国明王朝との朝貢冊封関係を通じて得た名称である「琉球」を名乗り始め、15世紀に至り中山王朝による統一国家・琉球国が誕生する。王権成立の基盤になったのは、中国との交易を通じて渡来した人々による技術導入で、墓の形態も同じく中国からもたらされたものである。1609年、薩摩による琉球侵攻があり、1867年、明治日本による琉球処分を経て沖縄県が誕生すると、日本による同化政策が行われた。沖縄戦の後は米軍による統治がなされ、1972年の復帰により再び日本へと移り変わっている。

沖縄は、とりわけ近代以降の植民地化と帝国主義との関わりを抜きにして語ることはできない。そこで想起されるのは Mary Louise Pratt の「Imperial Eyes (帝国のまなざし)」

(1992)である。Prattはヨーロッパを中心とする植民地宗主国と非欧州地域との接触をコンタクトゾーンと想定する。そこは地理的にも歴史的にも分離していた人々が接触し、継続的な関係を確立する空間であり、教養や不平等、支配と従属という非対称的な関係が生じる中で、相互作用や実践が行われてきた (Pratt 1992, 7頁)。文化人類学者の田中雅一は、ポストコロニアルな状況で、またグローバリゼーションがかつてない勢いで進行する中で、コンタクトゾーンは至るところに出現すると指摘する (田中 2007, 32頁)。日本や米軍の支配を経た琉球/沖縄も例外ではない。民俗学者の小熊誠は、前近代から中国、東南アジアとの関係の中で、人・モノ・情報が行き交う場であったことを指摘している (小熊 2016, 15頁)。このような琉球/沖縄という特異なコンタクトゾーンにおける文化接触から、今日の文化変容について検討する必要があるだろう。

その一例として、沖縄県設置後に起こった近代化の例が挙げられる。社会学者の小熊英二 (1998) は、当時の日本で西洋化を通じた近代化が図られていたことと対比すると、沖縄では和服着用や日本語教育を通じて、日本との同化による近代化が進められたと指摘する。琉球王国時代の慣習としての結髪や、既婚者が行っていた入れ墨は禁止されることになった。やがて方言禁止を伴う日本語教育は、徴兵と出稼ぎを通じて「日本人」として生きるために必須なものとなる (小熊 1998, 41-49頁)。このような「日本化」は、沖縄戦の後の米軍支配によって終止符が打たれたわけではない。

1950年代までは米軍を通じてロックミュージックなどの音楽やスパム (ソーセージミート) などの食、そしてアメリカ的な生活様式として自動車や冷蔵庫、テレビなどの家電が普及した。しかし1960年代になると反米と復帰に向けた日本との一体化言説とともに、日本製の家電が普及し始めるという、単純な日本化ともアメリカ化とも違う両者が交錯する空間が形成された (屋嘉比 2009)。

このような推移の中で、いわゆる民俗文化はどのようなまなざしを向けられてきたのだろうか。それは皮肉にも日本を経由して評価されてきた。1940年に沖縄を訪れた柳宗悦ら日本民藝協会のメンバーは、観光をテーマにした座談会において、美しい伝統建築や自然風景を保存、標準語励行の行き過ぎの自粛を訴えた。その中に「沖縄特有の美しい墓を保存すべき」という主張もあった (小熊 1998, 398-399頁)。同時期、沖縄を訪れた写真家・木村伊兵衛は、那覇市内の辻原で墓地の写真を撮っている (田沼編 1995)。遠くに海を見ながら、壮麗な石造りの家のような墓が続く風景、そして髪を結び上げ緋の着物をきた女性らが傘をさして石垣の間を縫うように歩く姿が、エキゾチズムを漂わせる。このような墓の様子を、柳も実際に見たのであろう。

しかしながら、柳らの訴えに対して沖縄県側は、標準語の励行や墓地の近代化は県の方針であり「文化的な趣味で物を言うな」と反発した。近代化という名の日本化が進められてきた沖縄において、特に言語習得は差別を克服する手立てであり、また広い土地を必要とする墓は、近代化、都市化の弊害とされたためである (小熊 1998, 399-400頁)。その後、沖縄戦の際には、斜面を掘り込んだ墓は防空壕やトーチカとして利用さ

れ、激しく攻撃を受けた場所もある。戦争を生き抜いた墓地も、戦後の復興と都市化の中で次第に整理されていった。

墓制や葬送儀礼は前時代的な評価をされながらも、民俗学や文化人類学において重要な研究対象とされてきた。筆者も沖縄本島で調査を始めた際には「都会に伝統はない」「離島へ行きなさい」と言われ、さらに南の島へと「伝統」を求めて流れていった。

そこでたどり着いたのが日本最西端の与那国島である。木村伊兵衛の写真さながらの墓地で、死者を送る儀礼を調査することになった。しかし島で出会ったのは、これから沖縄本島の都市部に墓を移すという一家だった。与那国では横穴を掘り込んで表面を琉球石灰岩等で固めた墓であったが、移動先では、日本でもよく見かける塔式墓と呼ばれる花崗岩の竿石に家名を刻んだ墓形に大きく変化してしまう。調査先からは「うちの墓、本島に引っ越すから、うちのなんて見てもしようがないよ。本島のもっとちゃんとした家の墓を見たほうがいい」と言われてしまったのだった。このエピソードから明らかになるのは、墓をめぐる「伝統」や「民俗文化」とは何かということをも島の人が外部からのまなざしを受けて内面化しているということである。

島の人々にとって「伝統的な墓」とは、例えば琉球王墓のような墓である。首里城の麓にある玉陵（たまうどうん）は、首里城の石垣同様、琉球石灰岩を積み上げて造られた墓で、世界遺産の一部としても登録されている。ちなみに「うどうん」とは「御殿」のことで、墓はあの世の家を意味する。また、沖縄戦の際に激戦地であった首里に奇跡的に残された石畳は、現在多くの観光客を集めている。王墓にせよ石畳にせよ、そこで使用されているのが琉球石灰岩で、現在では「沖縄らしさ」を表現するものとして用いられている。例えば、地方紙・琉球新報社の本社看板は琉球石灰岩でできた石塀あるいは樋川（ヒージャー）と呼ばれる井泉を模した形をしている。また、東京都内にある沖縄居酒屋では、外壁に琉球石灰岩を模した素材が用いられている。

## 2、琉球 / 沖縄の墓制研究史

それでは、現在の沖縄における王墓以外の墓はどうかというと、本土の石材会社が販売する輸入石材による墓石の利用が広がっている。もちろん墓の変化は急に起こったわけではない。本節では墓の研究史を簡単に紹介しながら、その変化を振り返ってみたい。

まず、琉球 / 沖縄の墓をめぐる以下のような幅広い研究がなされてきた。①南西諸島ではかつて、自然洞穴に遺体を放置していたが、王国時代に儒教思想を民衆にも規範化する過程で、墳墓を造って遺骨を祀る二次葬が行われるようになった。それにより形態的な変化が起こったとするような墓の歴史の変遷に関する研究蓄積（小川 1987；酒井 1987）、②伝承上の祖先の墓への巡礼に代表されるような墓を通じた祖先観や聖地信仰との関わりに関する研究（名嘉間 1979）や、③琉球において中国由来の風水思想がどのように展開したかという比較研究（渡邊 1994）がある。

しかしながら、④戦後広がった火葬に伴い洗骨改葬が行われなくなると、火葬骨のみ納めるようになるため、墓自体がかなり小さくなってきたことが指摘されている（加藤2010）。実際沖縄を歩いてみると、コンクリートブロックを積み上げたような簡素な墓から、近年では輸入石材を用いた墓まで、様々な形態の墓が混在していることに気づかされるだろう。

戦後の墓の新設の数的な推移を調査した井口（2015）は、1950年代前半に新しい墓が増えた理由を以下のように分析している。まず、米軍の「軍工事ブーム」による好景気に吸い寄せられた移住者によって沖縄中部の人口が増加した。次に基地建設によって広域な土地において墓地の撤去・移設が起こり、戦後の都市計画によって、戦前からあった墓が撤去されると、移動先として行政が準備する納骨堂、霊園型墓地という受け皿が必要になる。しかし、その数が十分でなかったり、集合墓地が家から遠かったりすると、簡易な墓を適当な場所に造らざるを得ない。そこで基地建設を機に広がったセメントブロック、コンクリート流し込みの簡素な墓が、次々と都市部に増えたのだった（井口2015、514-516頁）。

1959年の『琉球新報』の見出しには、「ブーム！墓のアパート、余裕が出た象徴」と書かれ、当時200ドル、なかには数千ドルの墓も造られた。特に米軍に土地を接収された人々のうち、次第に土地賃貸料を得て高価な墓を造る例もあったが、実態としては軍に雇われて現金を得るようになった人々が、生活規模にあった墓を造るようになったにすぎない（井口2015、518頁）。それが1960年代になると自動車社会になり、都市居住者が駐車場を完備した霊園墓地を求めるようになった（井口2015、519-520頁）。

### 3、墓の引っ越しに見る民俗文化の現在

前節の先行研究を踏まえて、以下では筆者の現地調査をもとにした墓の移設例を検討する。

最初に取り上げるのは、沖縄の最北端の集落から那覇周辺の都市部に仕事を求めて移り住んだ人々が、1954年に集団で墓を移動した例である。彼らは出身地に墓があるものの、遠方の出身地に数日かけて帰省をすると、当時の雇用先であった米軍からたちまち解雇されてしまうという問題を抱えていた。そこで同村出身の人たちと集団で那覇に新しく墓を造って、元の墓から遺骨を移動させた。移動にあたって、新たな墓に利用したのがコンクリートであった。台風と雨が多く、湿気で木造建築が虫に食われやすい沖縄では、米軍基地建設を契機にコンクリート家屋の建設が広がっていた。斜面に横穴を掘り込んで造る従来の墓より崩れる心配が少なく、成形しやすく、家屋にも用いられるコンクリートは大変重宝され、「あの世の家」である墓にも用いられるようになったという。移住者らが建墓時に建てた記念石碑もコンクリート流し込みで造り、出身村の名前を刻んでいる。

さて、月日が過ぎ、集団墓地造成からちょうど30年後に造られた石碑には、花崗岩、俗に御影石とも言われる石が使われるようになるという変化が見られる。変化の背景には、復帰を機に本土日本から参入してきた石材会社の影響がある。コンクリートも沖縄の強烈な日差しと台風の雨風によって表面が風化していくため、さらに硬く持ちのよい花崗岩が次第に好まれるようになった。

次に現在的那覇市郊外の霊園の様子を例に挙げてみよう。本土の墓と比較すると、地下カロートではなく地上部に遺骨を収納する空間があることに違いがあるが、「〇〇家」と家名を刻んだ塔式の墓は、「ヤマト墓」と言われることが多く、本土日本と類似点が見いだせる。石材も本土日本同様に中国産の輸入石材を用いて、既に中国で加工、文字入れを済ませて運ばれるため、数日で建てることできる（写真1、2参照）。



写真1：那覇市郊外の霊園（2002年、報告者撮影）



写真2：那覇市の霊園周辺に置かれた輸入石材のコンテナ（2002年、報告者撮影）

1966年に石垣市から那覇市に移住し、1978年に「ヤマト墓」を建てた人にその理由を尋ねてみたところ、「戦前戦中、東京で暮らした経験からヤマトの墓にした。ヤマトのものはいいものだという感覚から選んだ」と言う。流し込みコンクリートと違って、花崗岩にはきれいに文字を刻むことが可能であり、さらに表面も風化しにくいという利点がある（越智 2018、99-102 頁）。

とはいえ、先述した与那国の墓の例のように、元の墓から大きく形を変えてしまうことに移住者自身も戸惑う。そこで各家で工夫されているのが、墓に「故郷を表現すること」である。本事例では、石垣島の氏族名を刻むことで石垣島出身であるということを示している。移動以前は、どの墓がどの家のものかということはその集落の人間であれば知り得ていることで、墓自体に刻字する必要はなかった。しかし新しい土地に移動した場合、調査した事例の全てが墓石に家名等の刻字を行っている。コンクリートやとりわけ石材業者が関与する墓石を購入する場合、墓への刻字を通じて、墓に記録媒体という役割が追加されることになったのである。

また、同事例では自宅の庭から持ってきた木が墓の左手に植樹された。墓の左手には従来土地の神が祀られることが多いが、ここでは故郷の木が植えられたのである。こうして墓の移動を「故郷からの逸脱」とするのではなく「延長」、つまり祖先祭祀の継続を意味する実践であることが強調される。

ポストコロニアルな状況下で、日本や米国という外来からもたらされるものの積極的な利用と「よいものを墓に用いる」という考えの根底にあるのは、現在では史跡として保存される王墓に対し、市井の墓は使い続けるがゆえに、手を加え続ける必要があるということだ。墓は劣化と改修を繰り返し、時に移転しながら、そこでの祭祀が継続されていく。改修、移転時にはその時々「よいもの」を使い、かつ故郷のものを用いてバランスを取ることは、墓を通じて死をめぐる文化が創造され続けていく様子が分かる。以上を踏まえ、民俗文化を「伝統」や「固有文化」に閉じ込めずに研究していくことが重要であることを主張したい。

## 参考文献

- 井口学「日本復帰前の沖縄における墓の新設をめぐる」『国立歴史民俗学博物館研究報告』第191集、2015年。
- 小熊英二『〈日本人〉の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』（新曜社、1998年）。
- 小熊誠「はじめに」、小熊誠編『〈境界〉を越える沖縄——人・文化・民俗』（森話社、2016年）。
- 越智郁乃『動く墓——沖縄の都市移住者と祖先祭祀』（森話社、2018年）。
- 小川徹『近世沖縄の民俗史』（弘文堂、1987年）。
- 加藤正春『奄美沖縄の火葬と葬墓制——変容と持続』（榕樹書林、2010年）。
- 酒井卯作『琉球列島における死霊祭祀の構造』（第一書房、1987年）。

田中雅一「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国へのまなざし』を読む」『Contact Zone』第1号、京都大学人文科学研究所人文国際研究センター、2007年。

田沼武能編『木村伊兵衛 昭和を写す 1 戦前と戦後』（筑摩書房、1995年）。

名嘉間宜勝『沖縄・奄美の葬送墓制』（明玄書房、1979年）。

屋嘉比取『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす——記憶をいかに継承するか』（世織書房、2009年）。

渡邊欣雄『風水——気の景観地理学』（人文書院、1994年）。

Mary Louise Pratt. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. Routledge, 1992.